
介入者はモブばかり

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

介入者はモブばかり

【Nコード】

N5342Z

【作者名】

めだかクロニクル

【あらすじ】

俺は気がつくとかドリーになっていた。そう、全ては終わった。主人公はネビルだど！？

そんな、ギャグ作品です。

作品を完全崩壊させているので注意して下さい。
見切り発車です。

始まりは突然に絶望を与える

真っ暗だった。どこもかしこも暗くて、何も見えなかった。

俺はいつたどこにいます。暗いな、何も見えやしない。

・・・・・・目覚めよ・・・・・・目覚めよ・・・・・・

ああ、俺寝てたんだ。

そう思って、目を覚ますと、体が縮んでいた。

俺は黒の組織を倒す為に、戦うのだ。戦う為に博士に作ってもらった時計方麻酔銃とキック力増強シューズでやつらを踏み潰してくれるわ。

ぐふふな事を考えていると俺の口に何かが流し込まれた。それに現実へと引き戻された。

「ダドちゃん、たくさん食べましょうね」

誰がダドちゃんだよ。そう思いながら、口を開けてドロドロの食物を食べた。どうやら、俺は、赤ん坊になっていたようだ。最初は巨人の島にでも連れてこられたかと思ったが、どうも違っていったようだ。

離乳食のおいしさに舌鼓みを打ちながら、状況を分析してみた。

まず、目の前にいる人たちを俺は知らない。

俺は、見知らぬ二人の人間を見た。どうしてか、せっせと食事を口

に入れてくるが、知った顔ではなかった。むしろ、日本人である俺に、外国の人がなぜ親切なのか分からない。

そして、俺は自分の体を見た。やはり、先ほど確認したとおりの赤ん坊である。しかし、その体は通常の赤ん坊よりも2まわりくらい大きいと思われる。つまり、デ・・・ぽっちゃり系である。

ここから、推察するに、どうしてだか、俺はこの人たちの子どもになってしまっているのだろう。これは、いわゆる憑依というものだろう。

ここで、一つの問題が出てくる。ここがどこなのか。そしてどの世界なのかだ。

ここが現実なのだとしたら、まだ許容範囲だ。しかし、もしも漫画の世界だとすれば、大問題だ。忍者の世界やゴンさんの世界はやめてほしい。とてつもなく、死亡フラグ満載だ。

おそらく、この家の感じからして、現代である事は間違いない。だからといって油断はできない。死神の世界、あるいはめだかの世界などといった、現代の話もある。ここで、この世界のヒントになるものを探そうと思う。俺の戦いはそこから始まるのだ。

その日の夜、家の前に赤ん坊が置かれた。そう、俺に弟ができたのだ。その子を恐れるように現両親が俺を抱きかかえながら、震えていた。なんとか、その子の顔をうかがうと、どこかでみた顔だった。その子の名前はハリー・ポッターというらしい。そして、全てを理解した。

俺はダーダドリー・ダーズリーだったのだ。

始まりは突然に絶望を与える（後書き）

ホグワーツルート消滅。

断じて違う!!

「ハリー、遊ぼう」

「うん」

俺があまりにも、ハリーを凝視している事に小首をかしげたハリーが口を開いた。

「ダド、鼻から血が出てるよ」

「心配するな。愛のなせる奇跡さ」

そう、俺達はとても仲が良いのだ。当たり前の事だが、俺はそこの餓鬼ではない。前の俺は、高校2年で大学に飛び入学したのだ。日本じゃなければ飛び級して15歳で大学に入学する事ができた。どうして、俺が日本にこだわっていたのか、それは、俺がオタクだったからだ。アメコミもたしかに面白いが、日本独特なオタク文化をこよなく愛していた。

話が飛んだが、そんな俺が親の言いなりになるようなわけがないしこんな可愛いハリーをほっとけるわけがない。そう、俺は腐っている。だが、手を出す気はない。ハリオにはジニーちゃんという将来の豚がいるのだ。俺の弟を取ろうとはやってくれるぜ泥棒猫が。

俺の弟の溺愛振りがこうをそうしたのか現両親もずいぶんハリオに優しくなった。今は、ハリオのめんどろを見るために、一緒の部屋で寝ているが、将来は、ハリオにも部屋が与えられるだろう。

ハリオのめんどろを見る中には、ハリオの魔力の暴走を抑える役も僕にしかできないだろう。どうしてかわからないが、夜中にハリオが悪夢にうなされて魔力を暴走させた時、俺は壁に叩きつけられた。俺が壁側で寝ていたため、逃げ場がなく、何とかハリーに近づき、顔に触れると魔力が弱まった。顔中触っているとどうやら、眉間のしわと、旋毛のあたりを押すと暴走はおさまるようだ。そんなこんなで、ハリオも俺の事が好きになっている。

ハリオは間違いなくホグワーツルートに行くだろう。しかし、俺はおそらくいけない。だってポテンシャルⅡダドリーだ。無理である。ハリオの成長を見守れないのは嫌だが、メス豚どもに会わないのは嬉しい。会ってしまえば、JKもビツクリの嫌がらせをしまくり、ハリオに嫌われてしまう。それだけは阻止しなければならぬ。

「ダド、どうしたの？ いこー」

俺の考え込んだ様子を不安げに見詰めながらハリーが言った。

「ああ、行こうかハリー。俺より早く公園についたら、アメちゃんやるよ」

「僕勝つよ」

結果を言えば、負けました。

最初からハリオに勝たせるつもりだったけど、ちょっと焦らせてやろうと思って本気で走って見たら、ハリオは焦った顔をしてぎゅっと目をつむった。その瞬間、ハリオは姿を消し、何と公園にいたの

だ。姿あらわしかよ。偶然できたんだろうけど、卑怯な力だな。

断じて違う!! (後書き)

断じてBLではありません。

感動の涙必至、ハリオとの再開（前書き）

アメリカドラマのネタバレがある回なので要注意です。
入れ忘れていた話があったので改稿しました。

感動の涙必至、ハリオとの再開

「ダド、紅茶のお代わりいる？」

「ああ、ありがとう」

ハリオは、ずいぶん気の利くシヨタっ子に成長した。俺はといえば、そうダイエツトをして、スレンダーな体系に・・・ならなかった。唯の頭のいいぼっちゃり系だ。

「ダドは、もうじき行っちゃうんだね」

「ああ、そうだね」

俺がどこに行くか、そう、俺は10歳で大学に行く事になってしまった。どうして、そうなったかといえば、まず俺は、ハリーとの愛しきひと時を過ごす一方で未来知識を使い、ベストセラー小説を次々生み出したのだ。

それに目をつけた、お偉い教育者達が、図々しくも、ハリオと俺の愛の巢に攻め入って、面談の後にSATをさせられた。もちろん、俺は教育者達が目を見張る点数を出し、今に至るというわけだ。

本来、俺は文系の人間ではないが数式の検証や実証にとてつもない時間を使うよりは、記憶力を応用できる文系の方が良いのだ。ちなみに入学する大学はイエール大学だ。文系の学部はこの年で入学させるのは大変珍しい事らしい。

ちなみに、なぜアメリカなのかといえば、イェールからしか大学のお話がなかったのだ。きつとイギリスにいて変に介入してもらっては困るというJK呪に違いない。

ハリオとは必然的に休暇や学年の終わってから新学年に向けてしかあえなくなるから寂しいが、それも仕方がない。

（ハリオ、お兄ちゃんハリオのこと一生忘れないからね）

「ダド、さっきから7面相してるけど大丈夫？」

「げふん。大丈夫さ。それよりハリー、虐められたら言うんだよ。いじめっ子にオハナシしにくるからね」

「大丈夫だよ。ダドのおかげで、僕をイジめる奴なんていなくなっ
たもん」

たくましくなったものだど、ほくそえみながら歓喜の涙を流した事はハリオには忘れてほしいと思う。

2年がたとうとしていた。

え？ キンクリ？ 聞こえないーい。聞こえないーい。

大学でのハッピーライフは中間地点を迎えた。

俺の学生生活は主に図書館ですごした。イエールの蔵書量は尋常ではない。この本を全て読みつくすのは、至難の業だろう。無理だといわれれば、やってみたくなるのが人間だと思う。日夜挑戦中だ。そんな、本の虫な俺は学校の教授陣に重宝されている。記憶力を生かし、カンファレンスもビックリの早業で、本を探し出し、指定された文章が何ページに載っているか教えるのだ。カンファレンスのババアは、仕事を奪われて俺の事を嫌っている。図書館に行くと、よく後をつけられ、どの本を見ているのか探られているようだが、やつの見ている前では、自分でも読めない言語の本をとるようにしている。それをさも理解しているように頷きながら見るのが俺の日課だ。

教授陣は俺に会うたびに、ダドペディア（自分で名乗った）と呼び、本検索をさせられる。それは、あんたの仕事だろというと、大抵アイスのクーポン券をくれる。釣られてしまう俺が悪いのだが、これは明らかにJKの痩せるなという修正力を感じる。だいたい、日本でJKなんていったら爆笑だろ。ババアのくせに。でもちよっと本物のJKがローリングしてるところ見たい、むしろ一緒にローリングしたい。そんなことを考えていると頭に思い一撃がきた。

「痛っ、何するんだ、ダン」

「お前がまたエロイ顔してしてたから、また変態な事でも考えているのかと思ってさ」

こいつの名は、ダンという。才能もないくせに将来小説家になりたいたいという無謀野郎だ。

何かにつけて、俺に絡んでくるウザ男である。こいつは、自分の人生を小説にする自伝かいてるくせに小説だと言い張る中二病を発病していて、人生自体が現実とは小説より奇なりというのを体現したようだ。簡単に言えば、恋した相手がロイヤルフアミリー並みの金持ちで、恋仲で進んでいたら、実はこいつの親父と相手の母親が昔に付き合っていたことが発覚して、すったもんだのすえ、恋愛関係が義理のきょうだいになってしまった。

最初のうちはリア充爆発しろと思っていたのだが、義理のきょうだいという事を聞いて少し同情した。どちらにしても金持ちである事には変わらないがな。ちなみにダンの義理の弟はガチの同性愛らしい。さすがにネタにできないが、写真を見せてもらったときはショタっ子すぎてちょっと引いた。うちのハリオは成長と共にいかつくなっていくというのにな。

「お前の7面相はいつもの事だが、涙まで流すとはどうしたんだ？」
心の嘆きが漏れてしまっていたらしい。

「それで、お前なんのようだよ」

「お前がこの前くれた携帯ゲームを家族がほしがってるんだよ。まだ、あるか？」

「何だたかりかよ。まああるにはあるけど」

「それは良かった。お礼がしたいから、今度家に来いよ」

「いやだよ。お前の家、何か怖いもん」

「家族も会いたがってんだよ」

「上流階級なんかに会いたくないよ」

「美味しいアイスがあるんだけどなー、パティシエ呼んで作らせるって言ってたのにな」

「行きます、行きます。行かさせてください」

「おう、じゃあ、また連絡するな」

そうして、ダンと別れ、俺は自分の部屋に向かった。

部屋に戻ると、俺はいつもの儀式をする。
まず壁にかけられている、ハリオのポスターに一礼する。ちなみに

この部屋に入るやつには、皆にそれをやらせている。

そして、俺はハリオの秘蔵写真集アルバムをめくり一通り見ると合掌をして閉じる。

これが、俺の朝起きてからと家に帰ってきてからそして寝る前の習慣だ。

この行為をダンに変態だといったが、失礼なやつだ。唯のブラコンだ、日本じゃ当たり前だといっておいた。その証拠にいくつかの文献を見せておいた。いわゆる同人誌というやつだ。ダンは、アメリカでは控えろ、捕まるぞと言われた。司法に俺の愛が止められると思っているのか、まったく馬鹿なやつだ。

そんな事を思いながら、俺は作業に取り掛かった、俺が今作っているのはたまごゲームを改良した、モンスターのゲームだ。このくらの物だったら、なんなく作れる。趣味程度に作っているのだから、問題はないだろう。未来知識は大いに活用させてもらっている。

小説もそのひとつだ。ちょっと罪悪感に駆られるが、俺はハリオのために頑張るのだ。俺はマグルだから、魔法界には関われない。だからこそ、マグルである俺が社会的地位に着くことで、魔法界と人間界の橋渡しをし、ハリオ帝国を築くのだ。ヴォルの野郎はどうせハリオが倒してくれるから問題ない。

原作というのは異分子が関わるからずれるのだ。しかし、俺は、ダドリーだ。関われるはずがない。それに、ハリオは今ホグワーツの一年生だが時々手紙をよこしてくるが、原作に乱れはない。俺に手紙で聞いてきた内容が、ニコラスフラメルって知ってるか聞いてきた。いちよう、大学図書館で探した。それを見つけてレポートを書いて送っておいた。ついでに、ライターと懐中電灯（太陽光にもっとも近いと言われる）を送っておいた。悪魔の毘も真っ青だぜ。

ただ、その後、何となく気になって調べてみたら、魔法界にしかありえない情報が載った本まで見つけてしまった。俺が貴重書の棚を見ていたら、上級魔法薬とかかれた本や最も強力な魔法薬、あなたはマグル関係の仕事を考えていますね？等といった明らかに魔法界の本があったのだ。イエール図書館エ。

興味がわいて教授に頼み、イエール図書館の書庫の閲覧許可をもらい調べてみると、深い闇の秘術とかかれた本があった。俺は、それを見なかったことにした。唯一つ、確信したことがある。それは、同じく書庫で見つけた本の中に、マグルの中で働く方法イエール板と書かれている本があった。イエールにも紛れ込んでいるようだ。うん、無視無視、俺には関係ないさ。俺の魔法使いはハリオだけだ。そんなハリオとももうじき再開を果たす。

そう、ハリオが一年生を終えるのだ。俺は今、9と3 / 4に猛烈にドッキドキなのだ。

ハリオ再開の前日

「ね、ね、寝過ぎたー」

俺は寝巻きのままで飛び出した。

走りながら歯を磨き、そこらにいた知り合いから水をぶん取ると、うがいし、木に水をやっておいた。

「どけ！貴様ら、明日までにイギリスに行かなくてはいけないんだ」
ダドペディアのお通りだとなると、学生達は素直に道を空けた。子

ども相手に喧嘩するやつもないし、何より事典として扱うために
機嫌を損ねさせたくないというのが本音だろう。

道まで全力疾走して、タクシーを拾おうとするのだが、なかなか止
まってくれない。道に罵声を浴びせていると、一台の車が目の前に
止まった。

「乗れ」

俺は、ハリオに会いたい一心で、その車に乗った。

「どこに向かってるんだ」

「イギリス」

「そうか、わかった。空港に向かえ」

男は、運転手に指示を出すと、こちらに向き直った。

「お前、ダドリーだろ」

「ハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオハリオ」

「そうか、身内に何かあったか」

男は、何か考えた素振りを見せ、言った。

「安心しろ、俺が最速で届けてやるよ」

親切な人にイギリスまで届けてもらった。

なんと、服まで着替えさせられていた。いやー！俺の貞操がー！！ハリオだけのものだったのにー！！！！

名前を聞くのを忘れてしまっ御礼（文句）もいえないが、心の中で感謝しておこう。

現両親と再会しハグをしてから、キングクロスに向かった。俺は、ついたやいなや真っ先に9番線と10番線のホームに向かった。ここか、そう思い、俺は柱に突っ込んだ。グシャツという大きな音と共に、その場に崩れ落ちた。

「俺の邪魔をしようとは良い度胸じゃねえか」

怒りに満ち溢れた俺は、渾身の力で壁を蹴った。何度も何度も蹴っている。突然人が壁から現れた。蹴りを止めるまもなく思いっきり蹴りを放ってしまって、大丈夫か確認するまもなく、壁の中に消えた。しばらくして、恐怖に引きつった顔と怒りの表情で出てきた人が俺をガン見した。

「すみません。入れなかったもので」

「き、気をつけたまえ」

こめかみを引くつかせながら男は言った。男に連れられた少年があまりにも可哀想だったので、ハリオに渡す予定だった飴の一部を渡しておいた。

「こ、こんなんもの」

「捨てるの？」

捨てようと、地面に叩きつけようとした少年に俺はすかさず言った。少年はビクリと揺れた。

「美味しいから食べなよ」

少年は震えながら、飴を口に入れた。ハッとしたように顔を上げた。どうやら美味しかったようだ。まあまあツンデレではないか。デコだが。

「少年よ大志を抱け」

少年たちが去っていく背中に向け大声で言うておいた。

「ダド、何してるの？っていうか」

懐かしき美声を聞き振り返るとそこにハリオがいた。

「ハリー会いたかったぜ」

俺はハリオの前ではクールを気取っているのので体はハリオに抱きつかうとしたが、強靱な意志の力で押さえつけた。すると、ハリオの

ほうからハグをしてきた。

(やべ、鼻血でそう)

俺は、優しくハリーの背中に手を回した。

「ハリー、そのデブ誰？」

ハリオの後ろから声をかけてきた赤毛の少年が言った。

「誰がデブだ。これはJKの呪だ！魔法使いだったら呪を解け！！
それと俺はぼっちゃり系だ」

引いた顔をする赤毛にハリオがやさしく語りかけた。

「ロン、紹介するよダドだよ」

「ああ、靴下の」

靴下という言葉聴き俺は反応した。

「ハリー、クリスマスプレゼントすごく嬉しかったよ。ハリーの靴下をくれるなんて、自分の足も気にせず悪かったな」

「ダドには、僕の物があつたほうが良いかと思ってね。ダドのプレゼントのカシミアのマフラー、凄く暖かったよ」

後ろからロンが声を上げた。

「そうだ、僕ももらったんだ。ありがとう」

「ハリーがお世話になっているからね」

俺は、ハリオの友達にも送っておいただ。せいぜいハリオ帝国の礎となるがいい。

「ダド、でもやりすぎだよ。グリフィンドール生全員にプレゼント贈るなんて。マクゴナガル先生や校長先生にも贈ったんだって、それにスネイプにも」

「御世話になってるんだから当たり前さ。スネイプ先生にもお世話になったんだろう」

「ダド、何か知ってるの？」

「ハリーが手紙で教えてくれたろ。厳しくあたるって事は、それだけ目をかけられているということだろう？」

「そういうことか」

もちろん、俺は、全てを知っているので、スネイプにもプレゼントを贈っておいだ。ついでに、クイレルにもありとあらゆる魔除けを

送っておいた。ふふふ。

「ダド、また7面相してるよ」

「ああ、すまなかったな。あれ、ロン君はどこかな」

「もう帰っちゃったよ」

「そうか、では俺達も帰ろうか」

そう言って、家に帰っていった。

感動の涙必至、ハリオとの再開（後書き）

ダンとか分かる人いるんですかね。

眠いーよ。深夜のテンションがハンパないです。

ウィキペディアがこの時代には存在しないと言うツツコミは無しの方向でお願いします。

やべ、俺ロイヤルファミリーになっちゃった(前書き)

時系列は秘密の部屋です。

注意、髭の配管工とバイオな災害の話、卵型ゲーム、電子モンスターのゲームのファンの方はご注意ください。

やべ、俺ロイヤルファミリーになっちゃった

「僕、ロンの家に行くんだ」

俺は、俺の事をつついて邪魔をしてくるヘドウィグとの戦いを止めた。俺は絶望したハリーが行ってしまおう。俺を捨てて、行ってしまおうんだ。あのロナルド・ウィーズリーのもとへ。

「学校に行く前にね、少しだけロンの家に行く事になってるんだ。今日手紙が来て日にちが決まった」

俺はハッとした。そうだ、これは秘密の部屋の話しだと思ったのだ。そして、思わずヘドウィグを投げ飛ばした。

「ハリーが家出するのかと思ったよ」

「そんなわけないよ」

「では、バームクーヘンでも買っておくから持っていくといい」

「良いよ、そんなの」

「駄目だよ。それが礼儀というものだ。礼儀を欠けばキレられるぞ」

その前に、イベントがあるがと思った。実のところ、俺はそのイベ

ントまではいれない。

大学からの要請で行かなければならないのだ。始めは、ハリオとの時間の邪魔だと断ったが、あれよこれよどうしても断れなくなっていた。おそらく、修正力だろう。俺がハリオといれば、閉じ込めるなんてことをしないので、必然的に空飛ぶ車イベントが消滅する。そうすると、最終的にハリオはアラゴグの餌食になってしまう。それは、困るのでしかたなく大学に出頭する事になった。

「ダドはもうすぐ行っちゃうんだよね」

「悪いな、俺も断れなくてさ」

「ダドにはホグワーツのことたくさん話したかったのにな」

「俺が行くまでに、たくさん聞かせてくれよ」

「そういえば、どうしてニコラス・フラメルのことを知っていたの？」

「マグルの世界でも有名な人だからね」

「そうなんだ。マグルの話だから、僕達とは関係ないと思ってた」

「うん？じゃあ、あの情報は役に立たなかったのか？」

「えっとね、ハーマイオーニーがマグルの情報だから必要ないって言うてさ」

「見てないのか・・・」

「ご、ごめん。でも、事件が終わってから読み返したら、すごく役に立つ情報だったねってハーマイオーニーが絶賛してたよ」

修正力か、そう思いながら返答を返した。

「それは、光栄だね」

「ハーマイオーニーが、ダドと話してみたいって言ってたよ」

「いずれ、機械があればね」

にこりと笑って返答を返した。

そうして、毎日のハリオとの楽しい日々も終わりを向かえ、俺は大学に帰還した。

教授に呼び出されて、教授の部屋の扉の前でノックして入った。

「ああ、きたか」

この教授の名前は、アルバート・レスターという、俺を事典代わりに使う筆頭なのだ。教授の用事がなんだろうと思い聞いてみると、娘に彼氏ができて会いに来るそうで一人じゃ心細いだとか。

「あんた、緊急の要件で、俺がいなけりゃあんたの人生が終わるって言ってたじゃないか」

「何言ってるんだ、俺の人生の一大事だろ」

「もう、帰ります。そっごく飛行機に乗ってイギリスへ」

「頼むよ、いてくれよ。今度、好きなものおごるから」

「・・・寿司でいいですか」

「ガキの癖に生意気な」

「帰ります」

「わかった。わかったから、いてくれよ」

「はぁ。娘さんいくつですか？」

「14歳だ」

「教授ともあろうひとが、何をそんなにビビってるんですか」

「だってローティーンの話なんてわかんないし。ダドリーと年齢近いからいたら少しは楽かなって思ってる」

「ダメオですね」

「・・・子ども怖いんだよ。何考えてるかわからない」

俺はため息をつきながら、了承した。今帰っても修正力で帰れなくさせられるんだから。JKの力で飛行機を落とされたらたまったもんじゃない。

そうして、俺の早い学校生活は幕を開けた。

「あれ？ダドリーこんなところで何してるの？」

俺が喫茶店でパフェを食べている邪魔をする声がした。声をかけてきたのはダンだった。

「パフェ食ってんの」

「お前って、こうしてみると本当に子どもだな」

「失礼な。なんだと思ってたんだ」

「いやー喋ってると、時々、同世代かと感じさせられるからさ」

「んなわけないだろ。お前らみたいな髭男爵と一緒にするなよ」

「髭男爵って、それより、食事会の日が決まったぞ」

「は？」

そう言いながら、俺はアイスをほおばった。

「話しただろ、俺の家族が会いたがってるって」

「ああ、そうだったな。んで、いつ？」

「3週間後の予定だったけど、お前今日は暇なの？」

「まあ、得にする事ないし」

「ちようどいい、じゃあ今日今から俺ん家来いよ」

「え？」

「ちようど家族揃ってるしき、早い方がいいだろ」

「いやだって、パティシエ呼ぶんだろ？予約みたいなものあるだろ」

「あー、多分大丈夫だ」

「意味わからない。まあ別に予定ないからいいけど」

そうして、俺は食事会に招待された。

豪華すぎる食事だった。アイスも大変おいしゅうございました。まあ、なんていうか、家族だけじゃなかった。なんか昔から付き合いのある、親友みたいなものもいた。全員、ロイヤルフアミリーだったし美男美女ばかりだった。何かむかついた。

その中の一人は、なぜか、親しげに声をかけてきた。どうやら俺をイギリスまで送ってくれた人だったようだ。身内は無事だったかと聞かれ、意味がわからなかったが元気ですと答えると、意味ありげに、そうかと言っていた。

その後は、俺が作ったモンスターのゲームを渡すと、楽しそうに遊んでいた。男の子はやはりモンスターが良いらしい。

そして、どうしてか、たまごとモンスターのミニゲームを売り出す事になってしまった。バ○ダイさんごめんなさい。でも、赤字でなかったから良いでしょと無理やり納得しておいた。

その後の販売戦略は見事だった。ダンのきょうだい結構有名な人らしく、ゴシップ誌に出るときにゲームを見せびらかした。あつという間に流行の最先端になった。大量生産はせず、どのくらい流行るかみこして生産したほうがいいと忠告しておいた。その方が値は釣りあがると殺し文句をつけると、お前とは気が合いそうだと言われた。

俺は小説家件ゲームの発明家になっていった。そうして俺はフリーのアイディアマンとなった。カ○コンから依頼が来た時は、生物災害のゲームを出せと言っておいた。任天堂から依頼が来た時は、髭の水道工がカーレースをする話を提案しておいた。当たるのは確実

だ。

そんなこんなで、また一年がすぎた。ハリオへのクリスマスプレゼントはもちろんだまごとモンスターのゲームを渡した。とっても喜んでお返しにハリーが使い込んだ手袋をくれた。

そういえば、ハリオはホグワーツが怖いといって手紙をよこして来た事があった。秘密の部屋イベントが起きているのだなと思い、眼鏡はずっと掛けていろといっておいた。ついでに、ハリーの学校ってトイレとか水道の水ってどうやって流れてるのと聞いておいた。ふふふ、ナイスアシストだ俺。ちなみに近況報告で莫大な金をもらったと報告しておいた。

そうしたら、白紙の紙が送られてきた。きっとハリオはおっちょこちよいだから、手紙を書き忘れたんだなと思った。可愛いやつめ。

お礼を言いたくてもしょうがない、今か今かと俺はキングクロスでハリオを待った。去年の二の足は踏まない為、柱から少し離れていた。

「あっダド！」

ハリオと一緒に赤毛と縮れ毛が出てきた。俺は、会ってなくても人の名前がわかるので特だ。後ろに赤毛の女子がいなければもっと気分が良いが。

「え？この人がハリーの兄弟？」

縮れ毛が騒いだ。

「はじめまして、お嬢さん。ダドリー・ダーズリーだ。今年は大変だったそうだね。元気な姿が見れて良かったよ」

ハーマイオーニーは口をパクパクさせていた。

「あ、あのダドリー・ダーズリーですって！！ハリーあなた何も教えてくれなかったじゃない」

「え？何のこと？ダドの事は一年生の時から君には言ってあったはずだけど」

「だって、ダドリー・ダーズリーだなんて言わなかったじゃないの。10歳で大学に進学した天才児にしてベストセラーを次々出す小説家」

「大学ってなんだ？」

ロンが聞いた。

「大学って言うのは、魔法族には説明が難しいわね。簡単に言うなら、0歳でホグワーツに入学するようなものよ」

「0歳って喋れないじゃないか」

「もう！じゃあ、ホグワーツを一年生で卒業して魔法省で仕事するようなものよ」

「そいつは凄いや!!」

「ダドってそんなに有名人だったの？」

不思議そうにハリオが聞いてきた。

「うーん、どうだろう。珍しい事は確かだね」

「ふーん」

「ハリーだって有名だろ？」

「僕が？そんなことないよ」

さすがハリオだ。謙遜を心得ている。

「あの、今度おファンレターを送っても良いですか？」

ハーマイオーニーが聞いてきた。

「敬語はいらないよ。ぜひ送ってきて。そうだ、君に本をあげるよ」

そう言って、カバンから本を出し渡した。

「まだ、未発売の本だから内緒だよ」

ハーマイオーニーは目を輝かせて喜んでいた。子どもは無邪気でいいなと思っていると、恐らくロンの父親であろうアーサー・ウィーズリーが話しかけてきた。

「今度、私にもマグルの事を教えてほしいね」

「ええ、良いですよ。いつでも聞いて下さい」

そうして、別れ、俺達は、家に帰った。

家に帰ると、ハリオのお帰りパーティーをした。両親も子ども達も二人ともいなくなるので帰ってきてとても嬉しそうだった。

やべ、俺ロイヤルファミリになっちゃった(後書き)

今回の話に出てきたゲームに思い入れのあるかた、申し訳ありません。

次回、俺は気づいていなかった。この世界がハリーポッターの世界でない事に・・・なお話。

ハリー・ポッター・・・じゃないだと！**（前書き）**

ハリー・ポッター崩壊です。嫌な人は読まないでください。

ハリー・ポッター・・・じゃないだど！

俺が、花に水遣りをしながら、横にいるハリオを舐めまわすように見ていた。ハリオは何故だか震えながら綺麗な花を力強く抜いていた。おいおいハリオ天然も良いが、綺麗な花を抜いたら可哀想だろ。おっちょこちょいな可愛いやつめ。

俺は、ハリオを傷つけまいと別の事に注意が向くように話を振った。

「ハリーはずいぶん背が伸びたね」

「ダドはまた、体が大きくなったね」

俺は無言でハリーに水を掛けた。

「ちょっと、何するんだよ」

どうしてだか、ハリオはズボンのポケットに手を突っ込んだ。

「ああ、手が滑った」

そういうと、ハリオは俺からホースを取り上げようとした。だが、あきらかに俺のが力が強いので一生懸命引っ張っている。

「僕もダドに水掛けたい」

「嫌だよ」

「ダドとお揃いが良いのにな」

そういつて落ち込んでしまった。俺はしかたなくハリオにホースを渡した。ハリオは俺に水を掛けた。

「これで一緒だね」

「そ、そうだね」

そうこうしてると、ペチュニアが窓から声をかけてきた。

「何してるの！風邪を引くからお風呂に入りなさい」

俺達は二人揃ってはいっと声を上げ、風呂に行った。

二人で湯船に入っていると、ハリオが言った。

「僕って本当に大きくなってるんだね」

「ゲフン、ゲフン、な、何が」

「だってこの前まで、よく一緒にお風呂に入ってたのに、今じゃ狭く感じるから。」

「そ、そうだね」

「一緒にお風呂に入るのもこれが最後かもね」

「心配するな、風呂をでかくすれば良いのさ。すべては金だよ」

ハリオはなぜだかため息をついていた。

心配するな、俺はハリオの為に湯水のように金を使うために頑張ったんだ。

夜、みんなが寝静まったのを確認すると俺はキッチンへ行った。

キッチンで夜の残りのビーフシチューを皿に盛り、パンを手にして、玄関を出た。

そうして、茂みの中に向かうと小声で言った。

「あ、こんなところに美味しそうなシチューがあるぞ」

そう言って、俺は、その場を後にした。

しばらくして、出てきた黒い大きな犬がご飯を食べる姿にニヤリとした。

その日から、朝はパンとベーコンをラップで包み、それと水筒に入れた牛乳を茂みに向かって思いっきり投げた。水筒は後で玄関の前に置いとけよと叫んでおいた。ハリオには、不思議がられたが最近俺が開発中の頭のよくなる方法だと言っておいた。次の日の朝ハリオが同じ事をしていて、少し心配になった。

風船おばさんイベントが起きた。案の定ハリオは家を飛び出していった。

その日は、庭にステーキを放置した。

せいぜい、ハリオの為に地べた這いずりまわるが良い。俺のハリオをかどわしたら唯じゃおかないからな。

俺は、気ままに犬にえさをやったりしていながら、新学期の始まりを迎えた。

学校は最高学年を向かえ進路の事を考えなくてはならなくなった。

大学院に進む道もあったが、正直に言って俺はもう充分なほど金を持っていくし、大学図書館の本も八割読んだ。勉強意欲もあるにはあるが、ハリオのために勉強していたのだ。それに見合う価値はない。

ただ、大学の教授達はダドペディアがいなくなると困ると俺を引き止めた。

そんな事を考えていた時、ある教授からインターンで大統領のオフィスでお手伝いをする話が来たので受けた。俺は、成功者であるし小説家としても地位を築いている。そして、子どもという事でクリンなイメージがある。顔としてはもってこいのようなだ。俺の思惑はハリオ帝国の為だな。

未来知識はおおいに役立つから、大きな事件は微妙なニュアンスで伝えて防がせるようにしておいた。

そして、どうやらここにも魔法界のものがいるようだ。ある部屋の中からポンつという音がするとさっきまで人がいなかった部屋から人が出てくるのだ。監視体制大丈夫なのかと心配になる。

俺はといえば、基本的に書類仕事というよりは、大統領の演説文章のお手伝いをさせてもらっている。俺の記憶力を用いながらここでもダドペディア扱いをされる。大人は汚いなと思ってしまう。

そんな事をしているせいか、俺はSPをつけられた。

この人が死ぬほどうざい。すぐに、電話をかけたり、音がすると伏せろと叫ぶのだ。すぐに銃を出すから危ないなと思っていたら、案の定事は起こった。

俺がアイスを買に行き、並んでいると小さな子が親に連れられ風船を持って歩いてきた。そんな時、子どもが石につまずいて転んでしまい、持っていた風船が地面と子どもの間に挟まれパンツと音をたてて割れたのだ。その音を聞いたSPが銃を出したのだ、その場は叫び声におおわれ銃を向けられた女の子は泣き出すといった戦々恐々の事態に陥った。俺は急いでこの人は警察官でビックリしちゃったんだよと子どもに説明した。

俺はアイスも買わず帰宅し、アイスも買えなかったじゃないかと怒った。

「本当に・・・すまなかったと思っている」

間の長い謝罪の言葉を述べてきた。

銃はめったに出すなといったら、それはできないらしい。俺には自衛能力がないから自分がいち早く危険を察知しなければいけないのだとか。そんなに危ないのかと聞けば、SPは自分の娘はしょっちゅう誘拐されるだの奥さんは殺された、仲間も何人も死んだとか。話を聞くうちに思ったのは、こいつ死亡フラグ製造マシンなんじゃないか。こいつの側にいるやつは皆死ぬと中二的な事をほざいていたが、本当っぽいから引かざるをえなかった。

SPを変えてほしいと大統領に頼んだが、駄目だと言われた。SPの事を調べてみると、優秀には優秀だが周りの話を聞かない厄介いものらしい。ようは俺に押し付けたということだ。ただひとつ気になることが出た。このSPの護衛対象は必ず死ぬということだ。俺を殺したいのかと悪意を感じる。

そこで、解決策として俺はSPに自衛術を学ぶ事になった。銃とか撃ったことないと言ったら鼻で笑われた。

とてつもなく厳しい訓練の末、俺は何とか銃の撃ち方や当て方、人の気絶させ方、首の折り方、主に一撃必殺の方法を学んだ。ただ、長距離射撃や爆発物の使い方（主にC4）を学ぶ必要があったのかは謎だ。

最終的にはSPはにやりと笑って免許皆伝だと言っていた。唯一、嬉しかった事は、その鍛えられかたのせいでダイエットに成功した事だ。JKの呪はさすがに死亡フラグマシンのSPに敵わなかったようだ。

これで、ぽっちゃり系じゃないぞ。

そんな、ある日、俺が紅茶と半分欠けたチーズケーキを横に置き、小説（盗作）を書いていたところ、後ろにあきらかにSPではない気配がしたので机の下に備え付けてある銃を引き抜き、自然な動作

で右に回転しながら銃を構えた。

「何者だ」

「はて、君はもう少し体が大きかったと思うが」
パンッ

銃声が響いた。俺が威嚇射撃をしたのだ。

「答えろ、お前は誰だ」

「ホグワーツ校長、アルバス・ダンブルドアという。君の義理の兄弟の先生じゃな」

「・・・証拠は？」

「証明は難しいの、君はマグルじゃから」

「ハリーが2年生の時の校長室の合言葉は？」

「レモンキャンディーじゃ」

「ハリーが一年生になるまで食べられなかったお菓子は？」

「バーティーボッツの百味ビーンズじゃよ」

ハリーが話していた内容と一緒にだから、恐らくアルバス・ダンブルドアに間違いないと思った。

「それで、マグルの俺にどのようにですか？校長先生」

「君の本来のしゃべり方に戻してくれても構わんぞ」

「俺の喋り方をどうして知っている？」

「わしは、ちと耳が広くての」

「あなたの耳に変わる人が僕の近くにいるということか」

「うむ、噂通りすこぶる頭が切れるの」

「それで、用件は何です？」

「君にマグル学の教授にに就任してもらいたい」

「・・・前任の先生は？」

「死亡フラグだとかよくわからない理由で退任したが」

「同じ理由でお断りする」

「ふむ、マグルの中では常用語かの。わしもマグル学が専門ではないからよく知らぬが。時に聞くが、君はハリーを溺愛していると聞く。ハリーを身近に起きたいとは思わんのかね」

「俺はハリーを影から支えられれば良いと思っている」

「ふむ、君はハリーに危機が迫っていると思っているようじゃの」

「当たり前でしょう。生き残った男の子なんですから」

「ハリーがかの？」

不思議そうな表情を浮かべるダンブルドアに嫌な予感がした。

「ハリーはヴォルデモートを倒したのではないのですか？」

「それは、ネビル・ロングボトムのことではないかの」

「嘘だ!!!!」

俺はそう言っていると気絶した。

俺はその日、離見沢症候群を発病したのだった。

ハリー・ポッター・・・じゃないだと！**（後書き）**

「ハリー・ポッターと」ではなく「ネビル・ロングボトムと」
そんな話でした。

J Kの呪なんてダドリーの妄想でした。

番外ヒップグラフィフなあの人（前書き）

キャラ崩壊注意報が発生しております。

番外ヒップグリフなあの人

我輩はヒップグリフである。

名前はまだない。

呼ぶならば、グリちゃん、グリ兄さんと呼んでほしい。

我輩は、元人間であった。魔法薬学の教授であり、もともと、ダンブルドアに信頼された者であった。

我輩の前世の名はセブルス・スネイプという。

そんな、我輩はハリーポッターに記憶を渡し死んだのである。

そして、気がつくと、何故だか、ヒップグリフになっていたのだ。

驚いたことに我輩の魂は時間を遡りハリーポッターの入学年まで来ていた。たしか、最後の記憶は、死後の世界である胸糞の悪い4人組を追い回していたはずであった。

我輩の最近の苦悩はハリー・ポッターについてである。我輩が死ぬ前に見たあの慈愛に満ち溢れ、あの悲しそうな目、そうまるであれはリリーの目であった。そんな目を見た成果、ホグワーツで一方的な再開を果たしたとき、ヒピンブルンクエーなのである。

ホグワーツで、教授をしておる昔の我輩に虐められると知ったときは、我輩に頭突きをかましたほどだ。我輩めリリーの息子を虐めるとは許さんぞ。

そんなこんなで、今日も我輩はホグワーツを満喫中だ。

ある日、我輩は授業で見せるとの事でハグリットに呼び出された。どうやら、我輩にはバックビークという名前があったそうだ。

我輩は眩暈がした。そうである、今年、我輩は処刑される運命にあったのだ。最終的にハリー・ポッターに助けられるとはいえ、犬に乗られるのはごめんこうむりたい。

ただ、ハリー・ポッターに乗られた時は大いに気分が良く、上昇したり下降したりと楽しんだ。

ハリー・ポッターは大いに喜んで我輩も満足である。動物になったせいか撫でられるのは気持ちよかった。ハリー・ポッター限定であるが。

そんな時、ハリー・ポッターを突き飛ばした不埒者がいたのだ。怒り狂った我輩は、不埒者に、怒りの突進頭をみまっただのである。フンと体を揺らすや、ペツと唾を吐きかけてやったわ。見ると見慣れた金髪だった。ドラコ・マルフォイであった。

我輩は、やってしまったのである。処刑される。どうしようガクブルなのである。

ハリー・ポッター助けてくれるのであるよな？

唯、誤算が起きた。我輩の知らぬことが起こったのだ。そう、シリ

ウス・ブラックがホグワーツを闊歩していたのだ。その隣には、なんとピーター・ペティグリューまでいるではないか。

とりあえず、必殺の頭突きをしておいたが、どうなっているのだ。

我輩は、人語が話せない、確認が取れないのである。

我輩、ナギ二の檻に入れられたくらいやばい状況なのではないだろうか。

番外ヒップグラフィフなあの人（後書き）

や、やってしまったー。
ちよつと後悔してます。

ダドリーと出会えると良いんですけど。

介入者の悪意

「知らない天井だ」

見回してみると、どうやら部屋のようだった。とてつもなくエキゾチック。おかしなものしか目に付かない。

俺は、そこで状況を理解した。

俺はテロリストに拉致をされたのだ。くっ！まさか俺の下宿先が襲撃されるとは、想定外だ。

これは、非常に不味い状況だ。このままいけば、俺はきっとテロの重要事実に気づき、救出されるも証言する直前に間違いなくスパイの誰かに殺されるだろう。そうして、俺は24時間以内にテロを防ぐ礎にされる。テロが起こってしまったえば、生存フラグは、俺のSPのみ。他の人の生気を奪う事で、生き残っているに違いない。

ここまでの思考わずか一秒！

俺の状況把握能力が伺えるだろう。ダドリー万歳！！

「ふむ、それもマグルの常用語かの」

気がつくどダンブルドアが横に立っていた。どうやら、テロリストではなくヒゲリストに誘拐されたようだ。

「ここは、まさか」

「ホグワーツの校長室じゃよ」

最初から知っていたさとはかりに、フッと自嘲の笑みをこぼし言った。

「どうして、つれてきたんです」

「じゃから、君にマグル学の教授になってもらうために」

「断ると言ったはずです。それにホグワーツにはマグル避けがかかっていたとハリーに聞いたのですが」

「そこが、不思議なところじゃ。どうも、君には効かぬようだの。今も、用事は思い出さないじゃろ？」

「そうですね。しいていえばアイスを食べに早く帰りたいですね」

そういうとダンブルドアは、どこからともなくアイスを出した。ヒゲリストめ魔法チートとは恐れ入ったわ。

「わしもアイスは好きじゃよ」

俺は、アイスを口に含みながら聞いた。

「それで、俺にマグル避けが聞かないというのは？」

「実はの、君が寝ている間に呪文をいくつかかけてみたが、何も効かなんだ。君を運ぶのは苦勞したよ」

「効かなかった？」

俺には、その意味が良く分からなかった。いかに知識を詰め込んだとはいえ、魔法のように信じる者は救われる精神の、感情で威力が変わるサイコフレーム的なものなんて理解できないもの。

「恐らく君は、ハリーを肌身離さずずっといたじゃろ？魔力が暴走している時もじゃ」

俺は、某天才科学魔法師の弟の事を思い出した。

「そうですね。まさか、それで魔力に耐性ができたなんていうんじゃないですよね」

「そのとおりじゃ。大変めずらしいことではあるが。そのおかげで、君にお願いしやすくなったがな」

「魔法が効かないなら、ホグワーツにいても大丈夫だとおっしゃりたいので？」

「そのとおり。そして、君は受けるじゃろうと確信しておる」

たしかにと思った。魔法チートどもに魔法効かないって天敵だ。雷

にゴム。蛇丸が俺に魔法をかければ某自称神のような顔をする事になるだろう。

「魔法が効かないなら、まあハリーの近くにいるのも悪くないですね。ですが、条件があります」

「条件とは？」

「今、この世界で起きている事を全てあなたの知りうる限りのことを話してもらいます。条件は、その後です」

ダンブルドアいわく、生き残ったのはネビルであり、ハリーの両親は忽然と姿を消した。

ハリーが一年生の時に起きた事件はたしかにハリーも関わっていたが、最終的にクイレルを殺したのはネビルであり、ハリーは途中の仕掛けで挫折したらしい。

2年の時、ハリーはネビルと共に秘密の部屋に向かったが、ロックハートの足止めで、残る事になったらしい。

今年は、ヒップグリフを救ったらしい。

どう考えてもつндеます。来年でこの物語終了です。本当にありがとうございました。

「大丈夫かの？」

俺のあまりの絶望振りにダンブルドアは声をかけた。

俺は、状況の把握と絶望的な事実で体を猫背にしながらも何とか聞いた。

「シリウスとな？シリウスはジェームズとリリーを探し回っている」

「ペティグリューは？」

「ピーターもそうじゃ」

「ジェームズとリリーが消息不明になったというのを詳しく伺いたいですね」

「ロングボトム夫妻が襲われ、ネビルが生き残った。

しばらくしてのベラトリック・スレストレンジ、フェンリール・グレイバック等のメンバーがのポッター一家を襲ったのじゃ。

駆けつけたシリウス、リーマス、ピーターがどうにかして捕縛したのじゃが、ハリーを残して忽然と姿を消しておったのじゃ」

「ハリーをダーズリー家に預けた理由はなんですか？」

「リリーがダーズリー家の秘密の守人とやったからの。その方が安全だと考えたのじゃ」

「今までの話から察するに、リリーは生きていると思っているですね」

「秘密が引き継がれておらんからの」

「しかし、おかしいですね。ポッター家の秘密を漏らしたのは誰なのですか？」

「不思議な事にポッター家の秘密の守人はジェームズ自身だったのだ」

「自分でもらしたと？」

「分からぬ。それしか考えられぬが、なぜそうなったのかはわからないのじゃ」

俺は、しばらく考えてからもう一度を口を開いた。

「そういえば、どうしてハリーにはシリウス等が会いに来ないのですか？」

「それは、守人のせいじゃろう。わし意外秘密を聞いておらんからの」

そうだったのかと思うながらアイスを口に含んだ、このアイス不思議な事になると補充されるというチートなアイスだ。

「ネビルの方はどういう感じですか」

「どうとは？」

「魔法の実力です」

「自身がなく、あまり良いとはいえんが、才能はあるの。ここぞという時には力を発揮しておる」

「ネビルはどう介入を？」

「ネビルは今年、特に何もしておらんが」

俺は、頭を抱え込んだ。

これ、何？まじで、俺が、介入しなきゃ、来年ネビル死んで・・・死んでどうなるんだ？

ハリオ関係ないか。

いやいや、待てよ。もはやその時点で原作情報ゴミ同然になる。

ネビルは死ぬ復活、そして死亡だろう。杖イベントなんておこらないだろう。だって、ネビルだもの。

最終決戦時までの成長で強くなっていく、D A前でのネビルの実力では決闘すらできないだろうからだ。

不死鳥の騎士団イベントは起こらない。もはや、生き残った男の子の予言など意味がなくなるからだ。

そうして、謎のプリンスで、ダンブルドア死亡だろ。

ハリオ恐らく、レジスタンスにでもなるだろう。うん、つんでる。もう、今年どうにかしなきゃいけない。少なくとも、ネビルを修行させなきゃならないな。

・・・いや、待てよ・・・

俺はある事を思いつき怪しい笑みを浮かべた。

「ぐふふ」

「何を笑っておるのかの」

「先生は分霊箱をご存知で？」

「ほう、マグルの君がそれを知っておるとは、どうして知っておるのかの」

やさしい口調で語りかけるダンブルドアの表情は恐ろしかった。
(なにこの人、怖い)

「大学の図書館に資料がありました」

「どんなものかの？」

「深い闇の秘術という本に書いてありましたが」

「ふむ、マグルの世界にそんなものがあつたか」

「一般の人は閲覧できないようになっていましたから安全だとは思いますが」

「君はその本が読めたのかの？」

不思議そうな顔をするダンブルドアに俺は返答をした。

「はい、読みましたが、それが何か？」

ダンブルドアはおもむろに、俺の頭に手を置いた。

「ふむ、君には少し魔力があるようじゃ」

「魔力ですか？」

「ごく微量じゃが。君の家系からリリーが出ておるのでうなずける事じゃの」

「俺はスクイブということですか？」

「わからぬな。まあ今の状態なら浮遊呪文一発しか打てんじやろうな」

俺は上げて落とすダンブルドアの高等技術に落ち込みながら言った。

「それ、何もできないのと一緒にいますか」

「ダドリーには、マグルの武器があるから大丈夫じゃよ。それで、わしの知っていることは全て話したが、さきほどの条件とはなんじやの？」

「俺に空間拡張をかけた何か入れ物をください。それと、俺には助手件護衛をつけて下さい。あとあなたは全面的に僕を信頼して下さい

い。この学校で教師に命令できる権限を下さい。そして、ヴォルデモートが倒れたあかつきにはマグルの世界に開かれた魔法会にして下さい」

「マグルの世界に開かれたとな？」

「そうです。それから、もう一つ、俺がヴォルデモートの事に関わっている事は伏せて下さい」

「それだけの事を要求するからには、マグル学の教授に就任するだけというわけではあるまい」

「実は、個人的に確かめねばならないことがあります。僕の考えが正しければヴォルデモートを倒せるかもしれません」

「なんと！」

ダンブルドアは驚愕の表情を浮かべた。

「もしかしたらですけど」

俺はにやりと笑った。

介入者の悪意（後書き）

さてさて、ネビル君は何をたくらんでいるのでしょうか。

そして、思っても見ないところから帰ってきたホグワーツルート！！
わっしょいホグワーツ。

お礼参り（前書き）

ダドリーの一言日記

朝、ホグワーツを散策していたら、いきなりヒップוגリフに頭突きされたんだけど、何でだろう。

お礼参り

「えー今日から護衛件助手につきます、ピーター・ペティグリュースです」

（何これ。何の冗談？っていうかロンのペットはどうなってるの）

俺は、ニコニコと笑うペティグリュースを、どうしようかと恐ろしい事を考えたが、表情を取り繕い答えた。

「ペティグリュースさん」

「ピーターと呼んでいただいて結構です」

「えーあー、じゃあピーター、そちらも敬語は結構だよ」

「わかりました。あっ、わかったよ」

（何この天然。っていうか髪の毛フサフサなんだけど）

こうして、始まった、俺のホグワーツ生活だが、俺は新学期までホグワーツにいたことになった。なぜかといえば、家に帰ると連れて来るのがめんどくさいという理由らしい。ホグワーツ特急で来ますよといったら、それじゃハリー達の驚いた顔が見えないからつまらんじゃろうとのこと。

そういうことで俺はホグワーツに軟禁させられている。

「どうかした、ダドリー？」

「いや、別になんでもないよ。今日はどんな予定？」

「教授陣との顔合わせがあるね。始めは、セブルスだね」

うん。なんかおかしくね？スネイプって、まずハリオ、ラブだね。ハリオを守るためにホグワーツにいるんだよね。でも、狙われているのはネビル。これ、どういうこと？

「ピーター、ミスタースネイプって元死食い人？」

「そうだよ。マグルなのによく知ってるね」

「まあ、色々だね」

「そっか。じゃあ、行こうか」

俺達は、部屋を後にした。

ホグワーツを歩きながら、俺はめまいがした。ちょっと楽しみにしていた魔法のかかったものたちは、目まぐるしく動き、少し酔ったのだ。

「どうかした？」

俺の様子にピーターが声をかけた。

「色んなものが動いていて、ちょっと酔ったんだ」

「ああ、なれないとちょっと辛いかもね」

そう言って座り込んでいる俺に手を出してきた。手を掴み引っ張り起こされると、肩を貸され歩き出した。

（うん、この人ちっちゃい）

スネイプの部屋の前まで来るとピーターはノックをした。

「なんだね？」

ノックに応答するように出てきたスネイプが言った。

「ほ、ホグワーツのマグル学の教授にヴォエー」

俺は盛大に吐瀉物をスネイプに吐き出した。

「だ、大丈夫!？」

心配して背中を撫ぜるピーターと杖を振り自分の体をきれいにしながら怒りの形相のスネイプという対照的な二人を見ながら、俺は少しすっきりした。

「あ、うん。スネイプ先生のおかげで少しすっきりした」

「それは良かった。スネイプも役に立つ事があるんだね」

こめかみを引くつかせながら怒りの表情でスネイプが言った。

「ど、どういう意味かねペティグリュー」

「い、いや。魔法薬学の先生だから、良い薬があるんじゃないかと思っ
てね」

「あと、助かります」

俺もお願いすると、スネイプは部屋に通した。

スネイプの部屋は臭い、とにかく臭い。何が臭いかって薬品と親父臭がする。

俺はマスクをする事にした。

「何をしているの？」

ピーターが不思議そうに聞いてきた。

「いや、臭いから。ピーターもする？」

そう言って、ピーターに渡すとピーターもマスクをした。そうこうしている、タンプラーに何かを入れた、スネイプが部屋の置くから現れた。

「マグル用の薬草を煮詰めたものだ」

「マグル用の薬作れるんですね。さすがスネイプ先生ですね」

俺が驚いたように言うどふんっ少し嬉しそうに鼻を鳴らした。

「どうして、マグル用なの？」

「お前は聞いておらんのだな。こやつは、魔法が一切効かん。だから、魔法のかかっている薬は効かんのだ」

「え？ そうなの？」

「まあ、そんな感じらしい」

「あーそれで、用が済んだら帰ってほしいのだが」

スネイプが迷惑そうに言った。

「自己紹介はすんだけど。あなたには、まだ用がある」

俺はニヤリとして立ち上がった。不敵な笑みにスネイプは少し後ろに下がったが、俺の前でその程度のバックステップなど意味がない。

「な、何だ」

「あんた、うちのハリーにずいぶん嫌がらせをしてくれたらしいな」

「お前は、感謝だといってクリスマスプレゼントを贈ってきただろ
う」

見苦しい。なんと見苦しくお粗末な頭だ。俺はそう思いながら力の
限り叫んだ。

「それと、これとは別だ！マグルの力思い知るが良い」

俺は、コロンとあるものを転がしピーターと一緒に部屋を出た。

「なにをしたの？」

「フラッシュバンさ、あと催涙弾。あっそうそう、ピーターすまな
いけど、この扉、開かないようにしてくれる」

ピーターは不思議そうな顔をしたが俺が早くと急かすと杖を振り扉
をくつつけた。

しばらくすると、扉がバンバン叩かれ、激しく咳き込む音がした。

「ちょっと離れた方がいいかな」

俺は急ぐように離れた。ピーターもついてきているなということを確認したとき、遠くからバンっという巨大な爆音が響いた。

ピーターの顔が青ざめていたので、殺傷能力はないと言うとほっとした顔をしていた。

階段が上がっていると、今度は何かを破壊するような音が響きなにやら叫び声が聞こえたが無視を決め込んだ。

マグル様をなめるなよ。俺は、そう一言呟くと軽やかに階段を上った。そうして、俺は部屋に戻るとまた吐いた。

お礼参り（後書き）

スネイプ先生とは険悪ということをお願いします。

当たり前の話ですけど、普通に戦えばダドリーはぼこられます。何でもありのときのみダドリーは力を発揮するのです。何

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342z/>

介入者はモブばかり

2012年1月8日19時50分発行